

Photo Credit: Phyllis Graber Jensen/Bates College



日本の多様性の批判的な読みをめざして
アメリカ大学日本語上級コースでの実践から
此枝恵子 (バイツ大学) kkonoeda@bates.edu

きっかけとなった疑問

- 教室内の学生の「多様性」？ (Kubota, Austin, & Saito-Abbott, 2003; Mori & Takeuchi, 2016)
- 日本の〇〇：「典型的な」「普通の」日本人の視点？
- 「日本をアメリカと比べてみよう」？
- 日本の社会・文化・人々の「多様性」？

研究の目的と流れ

□ 日本語教育において日本の社会・文化・人々の多様性を教えることはどのような意義があるのか？

先行文献 → 2016-17教室での試み → 2017-18教室での試み

先行文献: 外国語教育において、多様性がどのように扱われているか

2016-17教室での試み: コース終了後、受講生がコースの意義をどのように語るか

2017-18教室での試み: 受講生と教員がどのようにテキストを読み解き関わっているか

文献：外国語教育と多様性

本質主義 Essentialism リベラル多文化教育 批判多文化教育

- 単一の規範をステレオタイプ的に提示
- 言語話者・文化が同質・均質であるよう
- 支配的イデオロギーに基づく規範を再生産
- 共通点・普遍的平等
- 本質主義的・固定的な違い
- 個人主義 > 権力・特権のはたらき
- 社会の不平等
- 本質主義的な文化観の背後の権力関係
- 文化を構築する言説 (語られ方、理解の仕方) を脱構築

(Kubota, 2004)

日本語上級コース

□ アメリカ北東部の小規模リベラルアーツ大学

	秋学期 (9-12月)	春学期 (1-4月)	通年
2016-17	JPN401	JPN402	履修
学生数	7	7	4
2017-18	JPN402	JPN402	
学生数	7	6	5



ジャンル別日本語：日本をクリティカルに読む
NORIKO IWASAKI AND YURI KUMAGAI

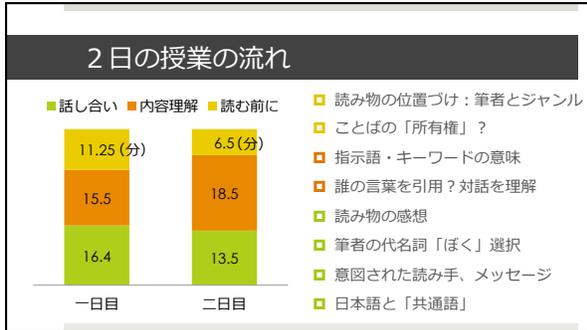
- 学生ディスカッション・リーダー
- 個人プロジェクト
- ピリオパトル・プロジェクトなど

『ジャンル別日本語：日本をクリティカルに読む』

□ 学習者が様々なジャンルの生教材を読み、その文脈や言説の理解から“unpack underlying assumptions and implicit meanings embedded in texts” (前提や埋め込まれた暗黙のメッセージを読み解く) (Kumagai & Iwasaki, 2015, p. 113)

- 読む前に
- 読みながら
- 読んだ後で：内容理解
- 読んだ後で：考えてみよう (ことば)
- 読んだ後で：考えてみよう (内容)
- 書いてみよう

Iwasaki, N., & Kumagai, Y. (2016). *The Routledge intermediate to advanced Japanese reader: A genre-based approach to reading as a social practice*. Routledge.



- ### 録音を聞いて学んだこと
- 質問の種類の幅
 - 背景・文脈（読み物の著者・出典・ジャンル）
 - 著者のことばの使い方（抜粋3）
 - 学生のコメントを拾い上げる教員の耳と判断力
 - 教員が拾い上げることで教室の話題に乗る（抜粋1）
 - コメントがどの言説の現れかに気をつけて聞く（抜粋2）

(段落 a)

7. 次の引用はだれが（だれに）言った（または、書いた）ことですか。

- 「日本語をもっている」「日本語をもっていない」
- 「まちがった日本語だ」
- 「日本語を知っている」「日本語を知らない」

8. リービ英雄は、どうして「日本語をもっている」という表現を使っていたのですか。その表現には、筆者のどんな気持ちがかめられていると思いますか。

録音から（抜粋1）

第一段落の概要をつかんだ後、第二段落の内容理解のため、ペアで7の質問の答えを話し合ったあと（宿題で答えを出したはず）それぞれの引用が誰のことばか、クラスに関して答えを確認

此枝： 「（日本語を知っている）は」正しい日本語、だから、日本人が言うこのリービ英雄の「日本語をもっている」はこれにしたほうがいい、それから「日本語をもっていない」は「日本語を知らない」にしたほうがいい

メイ： 「知らない」は、なんか真剣すぎる（笑）んじやないですか

トニー： うん

メイ： 「知らない」は全然知らないという意味ですから。なんか、まちがった日本語使った、書いたのに、日本語を全然知らない、とも言わないと思う

此枝： じゃあ、正しい日本語でも意味が違うんじゃないか？ですね？

「日本語をもっている」と「日本語を知っている」、何が違うんですか？

アレックス： 「日本語をもっている」というのは、あの、日本語を、言語からものにする、ような感じがします。ただの言語を話せる、だけではなくて、あの、こういう所有権を持っていること

メイ： 知っているは話せるだけ、話せて使える、感じて、ちょっと外国人

此枝： ああ、外国人として使える

メイ： あ、そうですね。日本人は私は日本語を知っているといたら変な感じ、だと思います

トニー： そうそう

此枝： あー

トニー： 普通なら、「私は日本人だ」と

此枝： ああ、イコールサインが働いていますからね

トニー： そうそうそう

読んだ後で：考えてみよう（内容）

- リービ英雄は、だれにどんなメッセージを伝えるために、このエッセイを書いたのだと思いますか。
- このエッセイを読んで、「日本は単一民族国家である」とか「日本語は日本人が話すことばである」というイデオロピーについて、あなたはどう思いますか。
- あなた自身も「日本語を母語としない日本語の表現者」として、リービ英雄のような英語を母語とする人が日本語で執筆活動をするにどんな意義があると思いますか。
- あなたも日本で（または日本人との交流で）日本のコトバや文化を「所有しない」者として扱われた経験がありますか。その経験について、(a) 日本人に伝えたいこととありますが、または、(b) 他の「日本語を母語としない日本語の表現者」に伝えたいことがありますか。

録音から（抜粋2）

段落1・2の内容理解を終えて、そこまでの感想を聞く

- 自分の経験と関連付ける
- お互いの経験を比べて、その意味を考える

此枝： ええ、これ読んでどう思いましたか。考えがありますか。

メイ： なんか、自分も、ちょっと同じこと考えるかなあ、と思います

トニー： へえ

此枝： 日本語について？英語について？

メイ： えーと、言語について、だから、ちょっと、やっぱり、自分の言語に対しては、私ちょっと守りたい感じ、気持ち（ウィル： あー）あって、そんなによくない気持ちがわかりますけど、やっぱりちょっとだけベトナム語を話せるのに「私はベトナム語上手よ」と言った人に会ったら、たぶんちょっとこの人は、

此枝： あ、じゃベトナム語はベトナム人のもの？（トニー 笑う）

メイ： いやいやそんなに、上手だったらそれは大丈夫ですけど、でもちょっと「こんにちは」だけ話したら「私は上手よ」だったらそれは良くないと思う

ウィル： ふん

此枝： じゃあ本当に知らない人が知っているふりをしたらそれはいやだ

ウィル： けども、日本の中ですごくベーシック日本語話することができる人は、いつも「あ、日本語が上手ですね」けど、もっと上手になればなるほど、他の日本人は「かわいい」とか「上手ですね」もう言わない

トニー： そうそうそう

メイ： やっぱり、だから、それ、なんかベトナム人も、その「こんにちは」だけ、聞いたら「あーそれはすごいなあ、ベトナム語話してるなあ」と言いますが、ほんとにはそんな、その人本当に上手と考えるのかなと思います。だけど、ちょっと厳しいかなあ。このエッセイを読んで、私もその同じ人達かな、そうですね。

此枝： 日本語について、「上手ですね」とか言われますか？
 メイ： ぜんぜんいわれません
 此枝： 日本で、ほめられますか？「その日本語は間違っている」と言われることはありますか？
 アレックス： 間違っているというのは先生
 メイ： ああ、やっぱり
 ウィル： そして私のホストファミリー
 トニー： そうそう！ホストお母さん！
 ウィル： そう
 トニー： 「トニーさん、それ言わないよ！」
 アレックス： 同じホストでした？
 メイ： いえいえいえ。すごい偶然
 メイ： でもやっぱりホストも、なんか一点では、Perspective？
 此枝： 視点
 メイ： 視点では、ホストファミリーですから、日本語を教える、ポジション？
 ウィル： ああ、そう
 メイ： にいますから、先生と同じですから、そういうこと言いますが、普通の日本人は、「それは言わないよ」とは
 ウィル： 私ちたぶんホストすれば、同じことを
 メイ： そうですね 英語を、ベトナム語のホストになったら、なんか
 ウィル： 私の仕事
 メイ： そうですね、仕事になりますから

読んだ後で：考えてみよう（ことば）

2. リービ英語は、このエッセイの中で、一人称「ぼく」を使っています。「私」と比べて、読者の受け取る印象がどう違うと思いますか。

録音から（抜粋3）

学生の経験からテキストに焦点を戻し、著者が代名詞「ぼく」を使ったことにより受ける印象を話し合う。

此枝： 「私」じゃなくて「ぼく」を使っているので受ける印象が違いますか？
 ウィル： 違うと思う
 此枝： どんな感じがしますか
 ウィル： あの、「私」と「ぼく」の違いは、まず、Formal？「私」のほうがフォーマルでしょうか？
 此枝： そうですね
 ウィル： だから、リービさんは「ぼく」を使うために、もうちょっとFormalじゃない感じがあ
 るでしょうか？だから「私は日本人じゃない」感じを表している
 此枝： 全体的には「である体」を使っていますね。ですから、とてもFormalな書き方をしてい
 ます
 ウィル： ああ、そうですね
 アレックス： 自分が外国人として日本語のことを話しているので、自分を上のところから下のと
 ころにする感じがします。
 此枝： たしかに「ぼく」は若い人が使う、子どもがよく使ったりするという意味では、すごく偉
 い人のスピーチ、じゃなくてもう少しPersonalな子供の視点で話している感じがするかもしれない
 ですね
 トニー： もう一つは、もう一つの可能性はたぶん、ウィルさんが言ったように、「ぼく」は、な
 んか、この最初の視点は、自分はほんとうの日本人だとの感じがある。。。日本人みたいな、まあ、
 日本人のような日本語の能力がある、表現があると思います（続）

此枝： 「ぼく」を使うことで日本語の表現者ということを表している
 けん： なにかエッセイでは「私」を使う、ことが普通だと思うけれど、まあ普通というか「ぼ
 く」は、エッセイでいうことを考えるとちょっと「まちがった日本語」？「日本語を知らない」
 ことじゃなくて、それは「日本語をもっている」ということを表現している？正しい使い方で
 ちょっと間違った使い方で、それがあの、正しい日本語の使い方みたいになれる
 此枝： じゃあ正しい、もっとも正しい使い方ではないかもしれないものを使うことで、自分が
 持っているんだということを示そうとしている？
 トニー： あの、そのルールは本当ですか？その、エッセイの中で「私」を使う
 此枝： どちらを使う人もいます
 トニー： ああ、そうですね
 メイ： 私の意見では、あの、「私」より「ぼく」は個人的な感じで、なんか、筆者と読者の中の
 距離も近いから、そんなPersonalの気持ちで自分で自分が言いたいことを強く言える、そういう結
 果のために
 此枝： もっと正直なことを、心の中のことを話している感じ
 メイ： 「私」はフォーマルですから
 トニー： じゃあもし、筆者は女の子なら？女の子なら私と使いますよね
 メイ： そうですね、もっと・・・やっぱり男の人にとっては違う。なんか、男にとっては「私」
 は丁寧な場合だけ、だけもないけれどたいいはいは。だから「ぼく」はもっと個人的な感じ。なんか
 でも、同じ女の人はカジュアルの場合も私も言えるから、その気持ちの差、はない

今後の課題

- 学べたこと
 - 読み物を文脈に位置づける
 - 読み物の「内容」のみでなく「書き方」に注目
- 話し合いをファシリテートする者の自己研鑽が必要
 - 問いかけの準備、考えられる言説の予想とその場での判断、
狭義の「日本語教育」の枠を越えた学び
 - 話し合いの振り返り
- 他レベルでめざすこと、実践を考えていく

参考文献

- Iwasaki, N., & Kumagai, Y. (2016). *The Routledge intermediate to advanced Japanese reader: A genre-based approach to reading as a social practice*. Routledge.
- Kubota, R. (2004). Critical multiculturalism and second language education. In B. Norton & K. Toohey (Eds.), *Critical pedagogies and language learning* (pp. 30-52) Cambridge, UK; New York: Cambridge University Press.
- Kubota, R., Austin, T., & Saito-Abbott, Y. (2003). Diversity and inclusion of sociopolitical issues in foreign language classrooms: An exploratory survey. *Foreign Language Annals*, 36(1), 12-24.
- Kumagai, Y., & Iwasaki, N. (2015). Reading words to read worlds. In Y. Kumagai, A. López-Sánchez, & S. Wu (Eds.) *Multiliteracies in World Language Education* (pp. 107-131) New York: Routledge.
- Mori, J., & Takeuchi, J. D. (2016). Campus diversity and global education: A case study of a Japanese program. *Foreign Language Annals*, 49(1), 146-161. doi: 10.1111/flan.12182